



幼少時の遊びを 回想する



良一

生まれたのは昭和二年六月八日、出生地は青森県弘前市だったが、父の職業の都合で二歳で東京にきた。したがって東京で育った。当時の世の中は非常に不景気だったようで、小学校に入学する頃から断片的ではあるが、家のように、学校のようになど、脳裏に焼きついている。家は借家でせまく、暗かった。小学校は渋谷区の本町小学校で、家から十分ぐらいの距離にあった。家の近所の環境は、西に川島商店街の終わりに目黒不動尊があった。目黒不動尊はハトがいて、餌をやった記憶がある。

幼少期の遊びはメンコが主流で、ビー玉、ベイゴマなど。遊びの友達にはボスがいて、遊び方はそのボスの流儀にしたがう。遊びを牛耳るボスとは、小学校の一、二年先輩であるとか、または体力があつたり体が大きとか、声も大きいのがなるようであつた。

またその頃、いじめはなかつた。せいぜいドッジボールをしている時など、要領の悪いモタモタしている子に罵声を浴びせる程度で、「イジメ」という今日的な問題はなかつた。思うに当時は、国民のほとんどが貧乏であり、貧乏人は貧乏人なりにいたわり合う気風があつたかと思う。

それから子供たちのアオシスは駄菓子屋であり、メンコ、ビー玉、ベイゴマのたいそう重要な仕入れ先でもあつた。

駄菓子屋で使う金銭は、一銭か二銭であつた。一銭で口に入り切らないような大きさのアメ玉が買えた。それが私は好きで好きで、黒砂糖の甘い香りがプンプンして口の中は黒くなつた。主題から脱線したが…。

その他にも自分で作る玩具もある。割り箸と輪ゴムで作る「割り箸鉄砲」などは、ゴムの弾力で紙の弾丸が勢いよく飛んだ。毎正月の門松がとれる15日以降は、竹を利用して竹馬を作つたり、チャンバラで使うため、よく切れる「肥後守（ヒゴノカミ）」（注・ナイフのこと）で棒を削つて、手頃な大きさにして遊んだ。また紙飛行機をこしらえて高い場所に行つて飛ばし、みなで滞空時間を競うなど、回想するとキリがない。

遊びの中でも相当、夢中になつたものがある。それはトンボ取りである。トンボはトンボでも、ムギワラトンボ、シオカラトンボ、赤トンボを取るのではない。

竹竿の先端に駄菓子屋で買う餅を塗り込み、大型のトンボをその餅の粘着力によって捕獲するのである。これは遊びというよりは、どちらかというスポーツ的な趣きがあつたように思う。

場所は東京の玉川上水の土手だつた。玉川上水とは、徳川幕府が急増する人口に備え、飲料水の解決策として水源を多摩川の上流に求め、水を引いた大事業に由来する。多摩川の源流は羽村市であり、今のJR青梅線の羽村駅周辺にあたる。歴史的文献を調べてみた。日本歴史シリーズ「将軍と大名」の年譜にこうある。承応二年、1653年、幕府は江戸市民に玉川上水に水道敷設工事を許可し、費用を与えた、と記載されている。

羽村から新宿までの43キロの水路沿いには雑木林があり、ホタルブクロの群生やタンポポの群生などもあつて、また文学者ゆかりの史跡もあり、三鷹あたりまで武蔵野の面影が残つていた。野鳥も多く、水辺には「黄セキレイ」が生息し、武蔵野の林には「尾長（オナガ）」の姿も当時は

見られた。

上水路は久我山で暗渠（あんきよ…地下に設けた水路）となり、地上の笹塚で地上に出ると、両岸には土が高さ10メートルぐらいに盛られ、その頂点はコンクリート幅7、8メートルの水路になっており、そこに水を流し入れ、さながら緑のオアシスといった観があった。その両岸には狭い遊歩道があったので、そこに竹竿を持って行き、大型のトンボ、「鬼ヤンマ」、「銀ヤンマ」を待つのである。

鬼ヤンマ、銀ヤンマが飛来する数は百や二百ではない。その数は数えきれないほどで、捕獲を狙う夏休み中の子どもたちの眼にも、それはそれは壮観な眺めであった。この状況はもちろん一日きりでは終わらない。すなわち毎日、毎日、夏の間は、この驚きの光景が子どもらの眼前にひろがるのである。玉川上水でトンボを追いかけた、在りし日の得難い遊びの日々は、今でも瞼の裏にくきやかに焼きついて忘れることができないものとなっている。

この水路は初台、新宿と続き、新宿の手前に大きな大きな浄水場があった。今の東京都庁から終点である四谷大木戸までの道のりは、ちょうど緑と花の旅といっても過言ではない。

私はこの頃から少年雑誌や、田川水泡の「のらくろ」などの漫画にのめり込んでいた。とりわけ少年雑誌の組み立て付録も楽しみで、はやく組み立てたくて学校から帰るのももどかしかった思いがある。夜遅くまで一生懸命になって組み立てたのも、かえることのできない楽しい思い出となっている。